

老人ホームさつき荘 コラム

『施設の居心地。スタッフとの距離感』

広大な水田を目の前に、ビールを飲みながら、木陰で居眠りでもしたい。

そんな素晴らしい環境の中に、養護老人ホームさつき荘が建っている。

数人のお年寄りの集団は、グランドゴルフを楽しみ、一人を楽しむ老人は、ベンチに座り、田んぼを眺めている。それぞれの時間を満喫しているようだった。

僕もベンチに座り、そのお年寄りに話しかけた。

「ええやろ！こんな最高の場所はないな。環境がいいし、なにより静かだな。

この施設では、食事は出るし、安心して暮らせる。行くところがない俺たちにはいいところだよ。だからここに感謝の気持ちがあって、いつも草取りをし、きれいであるように世話をしてきたんやで！」

このお年寄りが言う、『行くところがない』という言葉がひっかかった。

みんなそれぞれの個人的な事情を持っているから、ここに暮らしている。

ときに虐待であったり、家族関係のもつれであったり、本人の居場所がなかったり、それぞれの事情は、かなり複雑に交差すると聞く。それが一般的な特別養護老人ホームとは異なる施設だ。



さつき荘の庭先で、ゲートボールを楽しむお年寄りたち。大きな笑いが飛び交う、幸せな時間だ。

滋賀県内に8箇所の養護老人ホームがあるという。

特別養護老人ホームは、新設されると、新聞の折り込み広告や地元の話題になりやすいが、養護老人ホームの折り込みチラシは見たことがない。

だから一般の僕たちは、その違いを考えるきっかけもないだろう。

今回の取材を通して、知っておきたい施設だと思った。

さつき荘は、いい環境ではあるが、もうしばらくすると、ここから引っ越し、同じ法人が運営する養護老人ホーム『安土荘』と合併をすることになっている。

「絶対、これ以上の素晴らしい場所ではないはずやから、引っ越しがほんまに残念や！」と語るお年寄りが多いが、新しいところに環境が変わると、それなりに暮らしやすくなっていくだろう。でもお年寄りの気持ちもわからない訳ではない。



石川さんは、ベンチに座り目の前の水田を眺めている。時々、京都に電車で出かけ、その生活リズムを楽しんでいた。

ベンチで座り、ぼんやり水田の風景を眺めていた石川さんは、「ほんまにええわ！」と何度も何度も繰り返していた。

石川さんは、東京で洋菓子の職人だった。「パテシエですか？」と聞き返すと、「ドカタのおっちゃんに見えたやろ！」と、僕の表情を疑い、大笑いした。

「とにかく若い頃は、滋賀県から遠いところに出て行きたかった。東京に出るということは、当時では珍しかった時代やで。

そこでは17年間もパテシエをしていたが、仕事も辞め、名古屋の合板工場に勤め、そして滋賀に戻ってきた。

大病を患って、ここに世話になることになったんや。今は元気やで！」

これ以上のことは聞かなかったが、家庭に戻らない理由があるのだろう。それは戻れないのかもしれない。

時々、バスと電車を使い、京都で美味しいものを食べてくるのが日課だ。

このサービスがあることで、石川さん自身の暮らしの安定がある。

「今が本当に幸せな時間だ」という石川さんの何気ない言葉の背景に、スタッフのひたむきな苦勞が伺える。

幸せに暮らす当たり前を、サービスにつなげながらスタッフは、奔走している。

いつも、こうした現場で思うことは、点と線。施設というのは、その人にとって通過すべきところであり、長い時間、滞在するところではないと僕なりに考えていた。

それは施設側の意見に近いだろうが、実際、利用者家族からすればどうなのだろうか。できれば一生面倒を見て欲しいと願っている家族も少なくはないはずだ。



他のスタッフと同様、看護師の佐藤美智代さんは、ゆったりと自然に声をかけている。

日常の何気ない会話に花を咲かせるのは、さすがである。

長い廊下に整然と部屋が並ぶ。開けっ放しの部屋を覗けば、個性的で面白い。

その一室に暮らす佐藤さんが、部屋に招いてくれた。病院を転々とし、この施設に行き着いたという。

「施設入所は死んでも行かん！って、わがまま言っておったんや。でもタバコが吸えるってことが、決心する大きなきっかけになったんやけどもな。

夫が他界し、私もすぐに倒れた。家族にとっては大変なこっちゃ。

入所施設に入るということは、わしが我慢せなあかんのや。他からみれば、食って寝て、風呂に入って、極楽のようにも見えるかもしれん。でもな、人間に大切な自由ってもんが、ここにはないんや。

職員も一生懸命だろうが、利用者が同じ時間に行動しなくてはならない。

ご飯も一緒、お風呂も一緒。フーフーしながら、熱々の味噌汁を飲んでみたいしな。なにより、お鍋が食べてみたいわ！

ここは、今までの日常の暮らしではないでな！

自分の時間でいろいろなことをやってみたいわな」と辛口な口調が続いた。

でも、僕にとっては、憎めない人だった。むしろ好きなタイプの人だった。

「わしは、まだまっしやで！家族が面会に来てくれるさかい。それすら来てくれへんもんもようけおるで。気の毒やで」と、優しい言葉をときどき入れてくる。



佐藤さんは、辛口な言葉を発する反面、それは施設に対する発信でもある。

ここでの『滞在』が『暮らし』に変わる。

『お客さん』が、『住民』に変わる。

人が毎日顔を合わせている現場は、どうしても関係性が家族化してくる。

互いに慣れていくことで、それなりの居心地の良さに変わっていくのだろう。

施設は、自宅でもなければ、スタッフは家族でもない。



自分の身内のように振る舞う。笑いの絶えない現場だ。

心地がいい施設とは、暮らしやすい、スタッフとも気が合い、サービスとしても充実しているなど、いろいろな要素が含まれるだろうが、それが終の住処となって行くべきなのか、家族の元に帰って行くことが幸せなのか、僕の頭の中で、何年も平行線のままだ。そんなこと考えなくてもいいよ！と言ってくれるような、元大工だった山川さんが、部屋に招いてくれた。

「今の大工の仕事は本当につまらん、カンナもかけられんのが大工をやってるんだからな！」またも辛口なおじさんだ。



長年培ってきた仕事への向き合い方は、一つ一つの暮らしの中の丁寧さに反映している。こういう人と向き合うことで、現場は成長していく。

職人氣質の山川さんの部屋は整然と私物が整っている。

他界された妻の写真、孫の写真、様相もきちんとされていて、何よりタンスの中の服はユニクロの店頭のようにきちんとたたまれていて気持ちがいい。

「だってよ！大工ってもんは、親方と丁稚の関係だからさ、きちんとしていなかったら、その時点でこの仕事はできねえ、だからこの施設で昼間っから寝るのだけは、許せないんだよ！きちんとしたいんだ」

部屋には一升の酒が置かれていた。

「呑んでも大丈夫なんですか」

「俺は、許可をもらっているからな。でも食堂に持っていくことはしないし、コップ一杯と決めている。友達を誘うこともしない。酒盛りし始めたら、迷惑をかけるからモラルはきちんと守るよ。だってここに世話になっているんだから」

施設であろうが、自宅であろうが、暮らすことがとても丁寧な人だと感じた。

毎日のように施設内の草刈りをしてきている。

「お世話になっているから、せめてもの恩返しだと思っているんだ」

お年寄りたちが、自ら施設の環境や雰囲気を作りあげているようにも思えた。

ここは最後の砦ではない。と思いたい。

スタッフの人たちも、そんな思いで人と向き合っているのだと、僕は感じている。

そのために、養護老人ホームという存在が、誰もがわかるような施設であることを願っている。



掃除や手伝いなど、生活訓練という位置付けかもしれないが、率先して行う仕事っぷりは、自分のことは、自分でやるという生き方をしてきた証だろう。

それは施設のやってきた苦勞や歴史を知ることではなく、状況を知ることでお年寄りたちの幸せにつながっていくと信じているからだ。知ることで、自分の考えを生み出していく。意見が出てくる。行き詰ったことが多いと感じる福祉の現場に、新たな風を吹き込むのは、一般社会の人たちなのだろうと思う。

『地域とのつながり』という言葉のもつ重要性は、表面的なことだけでなく、社会を取り巻く大きな意味を含んでいると思う。

スタッフの人たちは、365日、それと向き合っている。